四　東京外国語大学時代

1　イスパニヤ学科から五部一類へ　一九四九―一九六一年

占領下の学制改革

敗戦の年一九四五（昭和二十）年八月から約七年間に及ぶ連合軍（実質的には米軍）の占領支配が始まった。占領下、連合軍総司令部（GHQ）は旧秩序の解体を目指して日本社会のさまざまな分野で上からの改革を強力に推し進めた。日本政府を通して巧妙な間接統治の形態をとったこともあり、国民はこれを甘受し、何らの抵抗もなかった。教育改革も進駐（占領）軍が推進した改革の一つであった。一九四七（昭和二十二）年三月に教育基本法・学校教育法が公布され、四月から六・三制への移行が開始された。旧制高校・専門学校・師範学校は旧制大学とともに新制大学（または暫定的に短期大学）に改編されることになり、翌四八年にはまず公・私立の新制大学一二校が誕生した。国立大学は、アメリカの州立大学に倣って各府県に一つ総合大学として設立する方針で、翌年五月全国に国立大学六九校が誕生した。

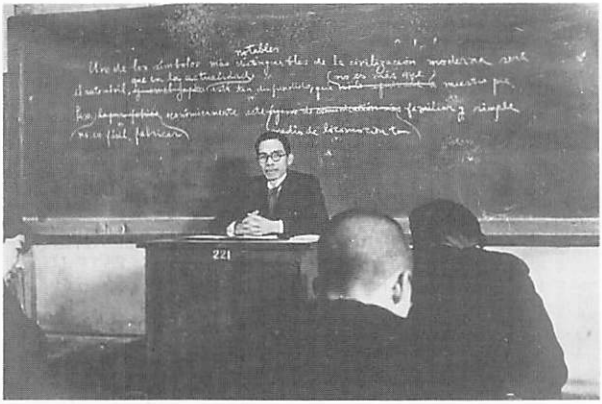
こうして一九四九（昭和二十四）年五月に新制の東京外国語大学が旧制の外事専門学校を包括しつつ発足した。当局には他大学と合併し、総合大学とする案もあったようだが、結局単科大学となった。大学の組織面では旧二部一四科が一二学科に改組され、イスパニヤ科はイスパニヤ学科となった。外専時代と同じく地域原則に基づく名称であった。その背景には外国語を中心にした地域研究を大学の柱としようとする意図があった。修学期間は四年で、専攻科

目は前期四八単位（一・二年各二四）、後期（三・四年）四〇単位、卒論一〇単位、計九八単位が必修であった。これに関連科目（後の専修科目）、一般教養科目、第二外国語および体育科目を合わせ、合計一七〇単位が卒業所要単位である。第二外国語は英、独、仏、露、中の五言語から一科目選択で、スペイン語はまだ入っていない。発足当時の外大では専攻科目つまり専攻語の授業が前期一・二年に各二四単位もあり、見かけ上は現在の倍になるが、これは週一回四五分の授業を二単位と計算していたためで、実際には今と同じく九〇分授業が週六回行われた。前期は学年制で、一年ごとに専攻科目の成績により進級する。この制度は今日まで続き、本学の特徴の一つとなっている。イスパニヤ学科の入学定員は戦前の外語時代と同じく三〇名でスタートしたが、翌五〇年には四〇名に増加した。

本学は、もともと物的な資産が乏しい上に、施設面でも人材面でも戦時中の痛手から立ち直っていない時期に急遽大学に昇格したので、多くの新制大学同様その名にふさわしい内容の充実を図るのは容易なことではなかった。戦後の外国語ブームもあって東京外大の入試は常に難関であり、とりわけスペイン語は高倍率であった。しかし、入学する学生の質に比して大学の内実が伴っているとは言い難い状態がかなり長く続いた。

五部一類への改編

一九五一（昭和二十六）年三月東京外専が廃止されたので、学校の組織は新制大学に一本化され、四月から学則改正により一二学科が七部に改編された。イスパニヤ学科は第五部第一類という学外にはわかりにくい名称に変わった。第一部（英米圏）から第七部（アジア圏）まで地域別に編成され、第五部はイベリヤ・南米圏に対応し、第五部第一類はイスパニヤ、第二類はポルトガルを対象とするものとされた。従前の学科と同じく地域原則に基づく区分であった。



授業中の笠井鎮夫（1941年頃）

今回の改正の特色は、専攻語学科目が前期三〇単位（一年一六、二年一四）と見かけ上は大幅に減ったことであるが、これは専攻語の単位数を週一回当たり四単位から二単位に計算するよう変更したためで、実際には一年は従来どおり週六回、二年は一科目減って週五回の授業となり、これに事情講義が各学年一科目加わった。単位計算上は専攻語よりも専修科目の比重が重くなった。また、後期三年からは語学・文学専修と国際関係専修のどちらかのコースを選択することになった。これは旧外国語学校時代にあった四科の区分の再編・復活とも言えるものである。後期専攻語学科目は専修により相違し、語文専修では卒論八単位を含み四八単位、国際関係専修は同じく卒論を含み四〇単位に縮小した。卒業所要単位は語文専修が一四六単位、国際専修が一五〇単位と表面上は削減された。第二外国語は一般語学科目と改称し、初めてイスパニヤ語が加わり、六言語となった。この時期の五部一類の教授陣は笠井鎮夫教授、会田由助教授、荒井正道講師、宮城昇講師、ホセ・ムニョス外国人教師の五人で、非常勤講師は一人もいない。

一九五二（昭和二十七）年四月、前年に結ばれた講和条約・日米安保条約が発効し、日本は沖縄と北方領土を除いたままようやく独立した。同年は旧制外専三年制から新制大学四年制への移行の狭間に当たったため卒業生はなかった。四月に学則改正が行われて後期に履修する専修科目がすべて語学・文学専修課程か国際関係専修課程のどちらかに分類され、志望する専修により選択できる専修科目が従来よりも制約されることになった。専修科目自体もかなり

増強されて種類が増えた。スペイン語科では発足時から一貫して国際関係専修を選択する学生が圧倒的に多く、語文専修は五三年の卒業生二四名のうち二、五四年二八名中〇、五五年二八名中一、五六年三五名中〇、五七年二八名中二にすぎない。

二クラス制の実施

一九五三（昭和二十八）年、五部一類は最初の新制大学卒業生二四名を社会に送り出した。一九五七（昭和三十二）年、スペイン語の入学定員は従来の四〇名から六〇名に大幅増員となった。新制大学発足時に比べ倍増したことになる。この年まで定員は仏、独、露、中と同じ横並びだったのにスペイン語のみが増えて英語（七〇名）に次ぐ大語科となったのである。この背景にはスペイン語の入学志願者が五〇年代以降激増していた事実があり、一九五五年には史上最高の入試倍率三七倍を記録している。定員増に対応して前期専攻語の授業は二クラスで行うようになった。この体制は現在も続いており、入学時に名簿順に従い学生はA（アー）とB（ベー）の二クラスに分けられる。前期二年間は、この専攻語クラスがホームルーム的役割を果たしている。一九六〇年日米安保条約改定に伴う安保闘争の嵐が学園にも吹き荒れた後、池田勇人内閣の所得倍増計画が始まり、日本は高度成長の波に乗って行く。スペイン語の就職は好調で、卒業生の大部分は商社・銀行・メーカーを中心とする企業に就職し、やがて海外勤務となる者が多かった。

新制大学の基礎がようやく固まったこの頃、一九五八（昭和三十三）年に笠井鎮夫教授（一八九五－一九八九）が退任した。岡山県出身で、一九一九（大正八）年卒業と同時に助教授に採用され、以後三七年間母校に在職した。一九二七（昭和二）年から約二年間スペイン・南米に留学している。終戦時に永田教授の後を承けてイスパニヤ科の主

任となり、戦後その建て直しに当たった。また、旧外専に四五年からわずか四年間だけ存続したフィリピン科（フィリピン語専攻は九二年に復活する）でタガログ語も担当している。プラスコ・イバニェス、ピオ・バロハなどスペイン現代作家の翻訳でも知られるが、実用語学に力を注いだ人で、入門書・教科書の分野での貢献が大きい。中でも『西班牙語四週間』（一九三三年、後に『スペイン語四週間』と改題）は今日まで六〇年以上も版を重ねている超ロングセラーである。同書は教科書としても使用された。戦後始まったＮＨＫラジオ・スペイン語講座の初代講師でもある。イスパニヤ学会創立時には理事長となり、その後会長も務めた。心霊学の研究家としても有名であり、独自の宗教的信念を持っていた。終戦直後の時期に教室で日本は世界最終戦争に敗れたわけではないと述べて学生たちを励ましたが、これが一部学生の反発をかい、占領軍に密告された。このため、総司令部に喚問される羽目となったが、スペイン語のできる米軍将校を相手に臆せずスペイン語で弁明し、公職追放の恐れもあった当時、結局何の咎めも受けなかったと言う。

女子学生の進出と最初の女性教官

戦後の教育改革で男女共学制の原則が布かれたため、東京外専も女子の入学を認めるようになり、全学を通じて最初の女子学生一名が一九四七（昭和二十二）年中国科に入学した。しかし、イスパニヤ科にはしばらくの間女子学生の入学がなく、大学昇格後の五一年に至って初めて北村（旧姓赤木）伸子、笠島（旧姓日原）真佐恵の二人が入学し、一九五五（昭和三十）年に卒業した。ただし、専修科ではすでに戦前に女子生徒の入学を認めており、西語部では一九三八（昭和十三）年当時、在籍していた女性がいる。

本学で最初の女性教官は、すでに戦前外国人教師の中にその例があるが、日本人としては一九五五年留学生別科が

委嘱した非常勤講師に始まる。スペイン語では一九六二（昭和三十七）年四月に野々山ミチ子（昭三二卒）が非常勤講師となり、翌年四月助手に採用された。一九六二年にはドイツ語学科で佐藤洋子助手が採用されていたので、野々山は専任としては二番目の女性教官であり、ともに大いに注目を集めた。しかし、後に二人とも本学から転出した。現在、全学教官の中で女性は二〇パーセント程度を占めているが、スペイン語専攻ではその後外国人教師を除き専任の女性教官は途絶えている。

大学の初期には一割以下であった女子学生が全学的に増え始めるのは昭和四十年代以降である。一九七三（昭和四十八）年にはスペイン語学科入学者六一名中、女子学生が三四名で、初めて過半数を占めた。その後多少の変動があったが、共通一次試験が実施された一九七九（昭和五十四）年以降、全学的に女子大化の傾向が定着する。スペイン語では八一年以降、常に女子の比率が男子を上回るようになった。それが最大に達したのは一九九〇（平成二）年で、入学者七五名中女子が六五名（八七パーセント）を記録し、スペイン語学科は全学中でもとりわけ女子比率の高い学科となった（全学入学者中の同比率は六五パーセント）。この傾向は現在まで続いており、一九九八（平成十）年度の場合、スペイン語専攻入学者七〇名のうち女子は五六名（八〇パーセント、全学では六七パーセント）である。スペイン語の女子学生は、数が多いこともあって学内では目立つ存在であり、卒業後も社会のさまざまな分野にめざましく進出している。

学会の創設とスペイン語教育界の拡大

一九五五（昭和三十）年十二月、瓜谷良平（昭十六後卒、拓殖大）、宮城昇、水谷清（大九卒、拓殖大）らの尽力により日本イスパニヤ語学会が創立された。初代会長は永田寛定、理事長は笠井鎮夫であった。学会創設を契機によ

うやく日本のスペイン語学界でも実用スペイン語と文学作品の翻訳だけの段階を脱して、言語と文学を学問として研究しようとする気運が高まって来た。創立当初は東京外語と大阪外語の同窓生が会員の大部分を占めていたが、次第に出身大学も多様化し、会員数も増加した。会員の専攻分野も語学・文学に限らずさまざまの分野に多様化して来たので、一九七五（昭和五十）年に日本イスパニヤ学会と改称した。現在、会員数は約四〇〇名で、機関誌『Hispánica』を発行する。その後、特に中南米地域を研究分野とする学会としてラテン・アメリカ政経学会（機関誌『ラテン・アメリカ論集』）が一九六四年に創設され、さらに一九八〇年には日本ラテンアメリカ学会（機関誌『ラテンアメリカ研究年報』）が設立されている。

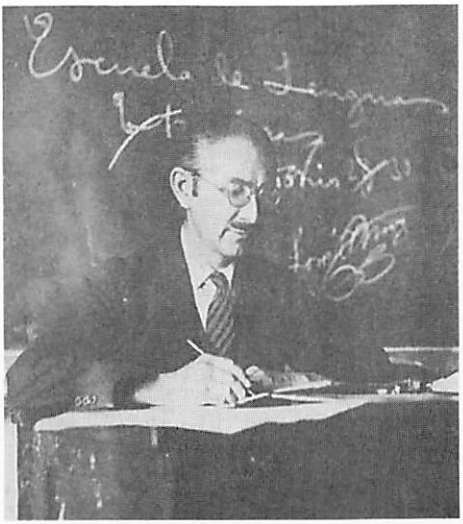
学会が間口を広げて行く一方で、特定分野の研究会活動も次第に活発となる。その先駆けと言うべきものは一九七五年十一月本学で原誠の首唱により創立された東京スペイン語学研究会である。現在は、本学だけではなく首都圏の多数の大学関係者・院生も会員に加わり、毎月研究会を開くとともに機関誌『スペイン語学研究』（一九八六年創刊）を発行している。前年発足した関西スペイン語学研究会（機関誌『Lingüística hispánica』）とともに語学研究上で果たして来た役割は大きい。

スペイン語圏関係の研究者が増加した背景にはスペイン語専攻の課程を持つ大学が戦後激増したことがある。戦前からスペイン語を第二外国語として教える教育機関は高等商業学校を中心にかなりあったが、専攻課程を持つのは東京外語のほかに大阪外国語学校（一九二一年創立時に語部開設）と私立の天理外国語学校（二六年語部開設）しかなかった。しかし、戦後は中南米諸国との通商関係が盛んになってスペイン語専攻者の需要が増大したことや、それに伴ってスペイン語圏への文化的関心も高まったことにより上智大学（五八年）を皮切りに公・私立大学の主に外国語学部の中に相次いでスペイン語（イスパニア語）学科が設置されるようになった。特に一九六〇年代は新設ラッシュ

で、南山大（六〇年）、清泉女子大（六一年）、神戸市外大（六二年）、京都外大（六三年）、神奈川大（六五年）、関西外大（六六年）、愛知県立大（六八年）と続いた。これらの学科の創設時には本学の卒業生がスタッフに加わった例も多い。なお、外国語学部系ではない地域研究の専攻課程としては一九八〇年東大教養学部教養学科に中南米分科が設置されている。

2　スペイン科からスペイン語学科へ　一九六一―一九九五年

スペイン語学科への改編



教室で作文添削中のホセ・ムニョス（昭和初期）

一九六一（昭和三十六）年四月、学則改正により七部類は地域名を付した一三科に改編された。第五部第一類はスペイン科と改称した。しかし、三年後の六四年四月にスペイン科はスペイン語学科となった。六一年から六三年にかけてスペイン科に入学した学生たちは何の説明もないままスペイン語学科を卒業することになった。名称の上では大学発足時と同じく学科が復活するとともに戦後初めて学科名が地域原則から言語原則による名称に変わったことになる。また、言語名が昔の南蛮文化の伝統を引き継ぐ「イスパニヤ語」ではなく英語式の「スペイン語」に変わったことも注目される。続い

て六五年にも学則改正が行われてこれまで語文専修と国際専修で相違のあった卒業所要単位がともに一四六単位となった。もう一つ目立つのは、専攻語学科目の単位数が減ったことで、前期一年は一六単位から一四単位、二年は一四単位から一二単位に縮小した。しかし、これは事情科目を従来の一科目四単位から二単位に改変したためで見かけ上の変化にすぎない。スペイン語学科に改称した六四年四月当時の専任スタッフはスペイン文学講座の会田由、荒井正道、長南実（昭一六後卒）、野々山ミチ子、スペイン語学講座の宮城昇、原誠（昭三一卒）、スペイン事情講座の花村哲夫（昭六卒）、外国人教師ホセ・ムニョスの計八人で、ほかに非常勤講師が五人（うち外国人一人）委嘱されている。

スペイン文学専攻の会田由教授（一九〇三―一九七一）は、一九六五年三月に退任した。個人として初のドン・キホーテ完訳（『ドン・キホーテ前編』筑摩書房世界文学大系一〇、一九六〇年、『ドン・キホーテ後編』同世界文学大系一一、一九六二年）を達成したことで特に知られる。それ以外にも古典のアラルコンから現代のロルカまで四〇編以上にわたる多数の文学作品を翻訳・紹介したほか、スペイン文学および文学史についての論考もある。熊本県出身で、外語卒業後、東京帝大図書館の司書を長く務めたが、戦争末期に軍属としてジャワに派遣され、戦後は一年あまり現地で抑留生活を送った体験を持つ。諧謔精神に富み、酒を愛する人でもあった。

大正初期にエスパーダについで第四代の外国人教師となったホセ・ムニョス・ペニャルベル（一八八七―一九七五）は一九六六（昭和四十一）年に退任した。ムニョスは一九一七（大正六）年にスペインから着任し、戦中・戦後の苦難の時期を挟んでほぼ半世紀もの間外語に勤務し、その間一度も母国に帰らなかった。日本人と結婚し、晩年日本に帰化したが、学生の前では決して日本語を話さず、スペイン人の生活様式を守り通した。常に温厚で、ユーモアのある紳士であった。バレンシア出身で、マドリード大学卒業後、歴史学の研究者として将来を嘱望されたが、有名

な文献学者アメリコ・カストロ Américo Castro の推薦で来日した。着任後は著作を残すこともなく、もっぱらスペイン語教育に専念し、そのかたわら戦前からＮＨＫの国際放送の業務にも携わった。一九七五（昭和五十）年日本の土と化したが、翌年遺徳をしのぶ卒業生有志の募金によって横浜外人墓地に追慕記念碑が建てられた。

後任の外国人教師にはフェルナンド・サンチェス・ドラゴ（スペイン）が一年間在任した後、一九六八（昭和四十三）年からエンリーケ・コントレラス（同）が第六代の外国人教師となった。

大学院創設

一九六〇年代に始まった高度経済成長によって日本は目に見えて豊かになった。そういう時代を象徴する東京オリンピックが一九六四（昭和三十九）年に開かれ、外大生も多数、通訳等のアルバイトで参加した。一九六六（昭和四十一）年四月、本学に大学院外国語学研究科修士課程（修業年限二年）が新設された。この課程にはゲルマン系、ロマンス系、スラブ系、アジア第一、同第二、同第三の六言語専攻が設けられ、その中の一つとしてロマンス系言語専攻（スペイン語）が設置された。スペイン語関係の専攻を持つ大学院は本学が最初であり、六七年神戸市外大、六八年大阪外大と続いた。二年後の六八年に布施温、清水透、杉山武の三人が修了し、スペイン語学専攻初の文学修士となった。大学院が設置されたことにより一九五三（昭和二十八）年専攻生として制度的に出発した外国語専攻科（修業年限一年）は廃止された。同時に学部組織が学科目制から修士講座制に変更された。語学・文学と並んで本学の学問的伝統を支えるもう一つの柱は地域研究であるが、大学院に地域研究研究科が設置されるのは一一年後の一九七七（昭和五十二）年のことである。

大学院が創設されたことによって本学ではようやく研究者育成の体制が整い、創立以来初めて教授陣の後継者を養

成する組織的なコースが確立することになった。大学院新設を契機に教官たちの間では以前にもまして研究重視の雰囲気が高まり、実用中心の傾向が強かった本学の伝統にも変化の兆しが現れ始めた。同時に大学改革の気運も高まったが、それが実を結ぶ前に大学は紛争の渦に巻き込まれることになった。

学園紛争の時代

一九六八（昭和四十三）年は世界的に学生運動が燃え上がった年である。西ドイツ、フランス、イタリア、アメリカなどで学生運動が激しくなった。先進国ばかりではなく、メキシコ、ブラジルなどでも学生運動が過熱した。学生運動の闘争目的はさまざまであったが、どの国でも生活水準が大戦後のどん底から脱却し、戦後のベビー・ブーム世代が大学に押し寄せてその大衆化が進んだ点では共通していた。国際政治面ではヴェトナム反戦運動の高揚、中国文化大革命の激化などの背景があった。

日本ではこの年の初めに東大紛争、ついで日大紛争が本格化した後、学園紛争の嵐が爆発的に全国の大学に広がった。戦前から本学は学生運動の比較的盛んな学校であり、戦後は一層それが顕著となる。しかし、この時期の学園紛争は全国的な広がりと全学を巻き込む深刻さという点で前例のないものであった。多くの大学で反代々木（反日共）系の活動家学生を中核に一般学生も組織化した全学共闘会議（全共闘）が結成され、闘争の主導権を握った。本学では六八年六月に学寮の建て替え計画に伴う新寮の管理規定をめぐって学園紛争が始まる。十月に全共闘が学園自主管理を唱え校舎を封鎖したので、大学は休校状態となった。十二月に講堂で行われた全学討論集会は全共闘の大学当局に対する「大衆団交」の場となり、教官たちは三日間にわたって拘束され、つるし上げを受けた。翌六九年三月に至って、大学は機動隊を導入、封鎖を解除して大学を立入禁止とした。この年、東大入試は中止となったが、本学の入

試は学外四か所の会場で行われた。四月から学園の正常化が図られ、学外各所で授業が再開されたものの、一部学生による授業妨害が頻発する。しかし、十月からは学内で授業が行われるようになった。

一九七〇（昭和四十五）年は、新学期の授業が六月から遅れて始まり、これ以降次第に授業は正常化して行くが、紛争中に表面化した代々木系と反代々木系間、反代々木系諸セクト間の対立はかえって激しくなり、暴力事件（内ゲバ）が頻発した。紛争の火種となった日新寮問題は、その後付近住民まで巻き込んでくすぶり続け、寮生と大学間の訴訟問題に発展する。結局、一九七六（昭和五十一）年三月に学生寮は廃止され、半世紀にわたるその歴史を閉じた。その後、一九八〇（昭和五十五）年七月にサークル棟移転問題をめぐる紛争で機動隊が出動したのを最後に暴力的な学生運動はほとんど姿を消すに至った。

学園紛争中はスペイン語学科にも闘争の嵐が吹き荒れ、学生の中にはリーダー格の人物もいた。紛争に対する教官の対応はさまざまであった。「ゲバ棒」にヘルメット姿で時には暴力も辞さない学生集団の前では教師の権威も吹き飛び、だれもがそれぞれ固有の人格をさらけ出すしかなかった。一部の学科・系列では教官が全共闘学生に同調し（造反教官と呼ばれた）、他の教官と敵対するような事態も生じた。大学に不満を持つ者同士の共鳴現象と言うべきであろう。しかし、スペイン語学科ではこのような無残な情景は見られなかった。

紛争後の大学

紛争の被害は大学のあらゆる面で大きく、後遺症が残った。一九六八（昭和四十三）年半ばから二年間近く教育・研究が中断状態となったため、この時期に在学した学生は戦時中とほとんど同様に十分な教育を受けられなかった。学生に占拠された校舎・研究室の荒廃はひどく、学生・教職員の中には暴力事件で負傷した者、過労・心労で病に倒

れた者、紛争中に辞職・転出した教官も少なからずいた。負傷しないまでも心に傷を負った関係者は少なくなかったはずである。その一方で、終戦後と変わらないなし崩しの転向現象もまた顕著だった。つい先日まで「授業粉砕」を叫んでいた学生が授業が再開すると単位認定を教官に要求する風景が見られた。一方、教官の側でも紛争中の言動・行動は一切問わないという合意ができ上がった。紛争中はどの大学でも大学改革が熱心に論じられ、さまざまの構想が打ち出されたが、実現したものは少なかった。紛争後、本学で目に見えて変わったのは建物で、戦災復興期の遺物である木造校舎は姿を消し、代わりに統一性のないコンクリート建築が狭いキャンパスに立ち並ぶようになる。こうして表面上大学は元に戻り、全共闘が主張した「大学解体」は実現しなかったが、紛争後見えない深層で大学は変質し始めた。

一九七一（昭和四十六）年四月、改革の一環として学則が改正され、卒業所要単位は一四八単位となり、以前より微増した。前期専攻語学科目は見かけ上は三六単位から二四単位（一・二年各一二）に縮小したが、これは事情科目が分離したためで、実質的には二年が二単位分増え、一・二年とも週六回の授業となった。この体制は現在まで続いている。また、一般教育科目の選択制限が大幅に緩められた。さらに、一九七八年四月に学則改正があって卒業所要単位が後期専攻語学科目と専修科目から各四単位減って合計一四〇単位になったが、演習科目を従来の四単位から二単位に計算することになったため実質的には変化がない。戦前の外語は進級の厳しい学校であったが、戦後もその伝統は前期の学年制の中で受け継がれて来た。スペイン語の一・二年生は毎年入試発表のときとあまり変わらない気分で恐る恐る学年末の進級者発表を見に行ったものである。紛争後、学科によってはこうした伝統がすっかり緩んだところもあるが、スペイン語ではほとんど変化がなかった。

紛争後、国立大学の入試制度は、大きな改革が行われた。新制大学の発足以来、国立大学の入試は二期に分けて実

施され、本校は二期校に属してきたが、受験界における一期校と二期校の格差解消を主な目的として一九七九（昭和五十四）年から全国の国立大学で共通一次試験が導入されることになった。しかし、これにより改革の意図とは裏腹に大学の序列化が加速することになった。それまでは漠然としていた大学間の受験上の格差が同じ土俵上で比較可能になったからである。その結果、格差は解消するどころか、受験界における地方国立大学の凋落がとりわけ著しく、全般に国立大学の評価が低下した反面、大都市の私大人気が高まった。受験生は、徹底した受験指導の下、偏差値により振り分けられ、学力相応の大学を選ぶ傾向が強くなった。それにより外語でも七〇年代まで入学者の過半数を占めていた浪人が減って現役の入学者が増えるとともに女子の比率が激増するようになる。一九九〇（平成二）年から共通一次試験に代わって入試センター試験が実施されるようになったが、本質的な変化は起きていない。

為替の完全自由化が行われた一九六〇年代後半以降、日本人の海外旅行が盛んになり、これと軌を一にして語学研修や旅行を目的とする学生の海外渡航も盛んに行われるようになった。公費留学の面で特筆されるのは、一九七一（昭和四十六）年に始まったメキシコ政府の交換留学制度で、初期には年間百名も採用したので、恩恵を受けたスペイン語学科の学生は多数に上った。

紛争の時代から脱却しようとするこの時期、河村功（昭六卒）を中心とする卒業生の努力で『東京外語スペイン語部八十年史』（東京外語スペイン語同学会、一九七九年）、同『別巻』（一九八一年）が編まれたことも特筆しなければならない。スペイン語科同窓生の歴史を振り返ろうとする試みが、語科開設以来初めて実現したのである。

スペイン語学科教授陣の拡充

旧制外専が大学に吸収された一九五一（昭和二十六）年当時五人であったスペイン語学科の専任スタッフは次第に

増え、それと連動しつつ学生定員も増えた。一九八〇（昭和五十五）年に専任教官は一〇人に達し、以後今日まで一〇人体制が続いている。入学定員は七九年に六〇名から七〇名に増加し、英米語学科と並び学内最大となった。これに次ぐのは六五－六六年以降スペイン語学科と並んでいた仏・独・露・中の四語学科（六〇名）である。専任教官の中で外国人教師は一九七七年から二名となり、スペイン人と中南米人を一名ずつ採用する慣行が続いている。中南米出身の最初の外国人教師は同年就任したギリェルモ・ヨシカワ（ペルー）であった。専任が一〇人体制となった一九八〇年四月当時の教授陣はスペイン語学講座の宮城昇、原誠、上田博人（昭五十卒）、スペイン文学講座の長南実、牛島信明（昭四十二卒）、スペイン事情講座の野間一正、中南米事情講座の清水透（昭四十一卒）、髙橋正明（昭四十六卒）、外国人教師のエンリーケ・コントレラスおよびアンヘル・ブラーボの計一〇人である。大学発足時には皆無であった学科の非常勤講師も授業科目の拡充に伴って次第に増加し、この年には一〇人（うち外国人一名）を数えるようになった。

紛争末期の一九六九（昭和四十四）年に花村哲夫教授が急逝したが、その後七八年から八三年までの間に荒井正道、宮城昇、長南実の各教授が停年退官し、学科では戦前・戦中に旧制外語を卒業した教官がすべて大学を去った。一九七〇年に採用された中川文雄講師（中南米事情）はスペイン語学科専任教官としては初の他大学出身であったが、助教授時代に他大学に転出した。これらのポストは、牛島信明（スペイン文学）、髙橋正明（中南米事情）、寺崎英樹（スペイン語学、昭四十卒）、桑名一博（スペイン文学、昭三十一卒）など戦後卒業の世代が占めるようになった。その後、平成に入って一九八九（平成元）年から九一年までの間に野間一正、桑名一博の両教授が退任し、若い世代では上田博人助教授と清水透教授が他大学に転出した。

花村哲夫教授（一九〇七－一九六九）は岐阜県出身で、笠井の伝統を引き継ぎ、商業通信文や経済関係の文献講読

を担当した。授業とその評価が厳しい教官として有名で、特に新入生には恐れられた。本学卒業後、交通公社に勤務した経験があり、一九五七（昭和三十二）年に小樽商科大学から転入して一二年在任した。

宮城昇教授（一九一九－一九九八）は東京市出身、卒業と同時に入営した世代に属し、終戦後復員して教職に就き、三六年近く在任した。スペイン語学専攻で、『基礎スペイン語文法』（白水社、一九五八年）などの入門書のほか『スペイン基本語辞典』（白水社、一九七二年）、『和西辞典』（白水社、一九七九年）、『現代スペイン語辞典』（白水社、一九九〇年）などの辞書編纂で監修者あるいは共著者として中心的な役割を果たした。学生に「仏の宮城」と言われた温厚篤実で、謙虚な人柄であった。イスパニヤ学会創立者の一人であり、理事長・会長も務めている。

博士課程設置

一九六六（昭和四十一）年に設立された大学院は研究者育成のため大いに貢献して来たが、修士課程だけではその目的のために不十分であるという声が強まるようになった。一九九二（平成四）年四月、ようやく大学院地域文化研究科博士課程が新設され、従来の外国語学研究科と地域研究研究科は一本化された。修士課程に相当する博士前期課程（二年）は七専攻に分かれ、スペイン語関係はヨーロッパ第二専攻に含まれることになった。博士後期課程（三年）は地域文化専攻という単一の課程であり、修了者には学術博士の学位が授与される。後期課程の発足当時、スペイン語学科関係で授業を担当したのは原誠（スペイン語言語論演習Ⅰ）、寺崎英樹（同Ⅱ）、牛島信明（スペイン言語文化論演習）、清水透（ラテンアメリカ歴史社会論演習）であった。新しい地域文化研究科は名称どおり地域原則による組織であるが、前期・後期とも言語文化コースと地域研究コースに分かれている。前期課程にはその他に国際交流専修コースが新設された。

3　欧米第二課程スペイン語専攻への改編　一九九五年―現在

学部改革と七課程への改編

一九九二（平成四）年、文部省が大学設置基準を改正して規制を緩和し、大学改革を推進する方針を示したことを契機に全国の大学で教養部改組を中心とする大学改革が急速に進むようになった。本学では一九九五年四月に大学発足時以来の大きな学部改革が行われ、従来の一四学科が解体され、七課程・三大講座に改組された。改革の目的の中には専門性の重視と語学科の壁を崩すということが謳われていた。七課程は地域原理に基づき分けられたが、スペイン語学科はフランス語、イタリア語、ポルトガル語とともに同じ課程に改編され、欧米第二課程スペイン語専攻と称することになった。学生は後期三年から従来の語文と国際関係の二専修に代わって言語・情報、総合文化、地域・国際の三コースのいずれかを選択することになった。卒業単位は従来の一四〇単位から一二六単位に縮小され、必修単位も削減された。専攻語学科目は主専攻語科目と改称され、前期二四単位（一年一二、二年一二）の必修は変わりないが、専攻語の前期事情は地域基礎科目、後期専攻語学科目は地域専門科目と改称され、合わせて二〇単位必修に削減された。

大学発足後行われた教科課程の改革は、一貫して必修科目を減らして卒業所要単位を縮小し、学生の負担軽減を図るという方向で進められてきた。今回は特に後期専攻語が各学年一科目のみ必修（計八単位）と削減された。また、科目選択の自由を広げるとともに専門性の強化を目指すというある意味で矛盾する目標が追求されたと言える。こうした改革の方向が果たして成功しているかどうかは、卒業生に対する社会の評価を考慮しながら今後再検討する必要

があるだろう。

スペイン語専攻の現在

学部改革により教育母体としてのスペイン語専攻は残されたが、学科は消滅した。外国人教師を除く全教官が三大講座（言語・情報、総合文化、地域・国際）のいずれかに分属することになった。これは従来学科内にあった語学、文学、事情の三講座の区分にほぼ対応する。一九九八（平成十）年現在、スペイン語専攻の担当教官八名は言語・情報講座に寺崎英樹教授（スペイン語学）、高垣敏博教授（同上）、川上茂信講師（同上、昭六十卒）、総合文化講座に牛島信明教授（スペイン文学）、杉浦勉助教授（スペイン語圏文学、昭五十四卒）、地域・国際講座に高橋正明教授（ラテンアメリカ民衆運動）、立石博高教授（スペイン史、昭五十一卒）、安村直己講師（メキシコ史）が所属する。改革後の一九九六（平成八）年には三八年間在任した原誠教授（スペイン語学、言語・情報講座）が退官している。

外国人教師では二九年間その任にあったエンリーケ・コントレラス客員教授が一九九七（平成九）年に辞任した。一九九二年以降、文部省の方針もあって国立大学で新たに採用される外国人教師は短期間で交代することになったので、コントレラスやかつてのムニョスのように伝説的な名物教師が今後現れる可能性はほとんどなくなった。後任のスペイン人教官としてはビクトル・カルデロン・デ・ラ・バルカが就任している。もう一人の外国人教師は、アンヘル・ブラーボ（スペイン）が一九八五年に退任した後、マリーア・アンヘリカ・ロドリゲス（チリ）、ドロレス・ヤニェス（メキシコ）、シルビア・ノベーロ（同）、ニーナ・リュイ・デ・ハセガワ（同）といずれも中南米出身の女性教官に引き継がれ、一九九八年からはやはり女性のグラシエーラ・クラビオート（同）がその任にある。

非常勤講師は、スペイン語専攻および副専攻スペイン語のために現在一一名（うち外国人二名）が委嘱されている。

新制大学になってからカリキュラムが多様化したため非常勤スタッフへの依存度は飛躍的に高まり、その貢献も大きい。大学発足以降一九九八年度までにスペイン語学科が委嘱した歴代の非常勤講師は八〇名以上（うち外国人六名）に上るが、その大半は、いわゆる事情関係の科目担当者である。戦後、一五年以上の長期にわたり出講した講師は橋本定久（時事スペイン語）、増田昭三（ラテンアメリカ歴史文化論）、ヘスス・マロート（スペイン語作文）、倍賞和子（ルーマニア語）、杉山晃（ラテンアメリカ文学）、後藤政子（中南米現代史）、戸門一衛（現代スペイン社会経済構造論）の各氏である。

受験人口の増大に対処するため、一九八六（昭和六十一）年以降文部省の要請に基づき本学でも臨時増募が行われることになった。スペイン語の入学定員は、同年七〇名から七二名に増員、八七年には七四名、八八年からは七五名に増加した。前期一・二年は二クラス体制が続いてきたが、スペイン語は学内でも有数の留年の多い学科であるため、増募の時期、専攻語の授業では一クラスに五〇名近い学生がひしめき、およそ言語教育には不適な環境が生じた。この事態は今もあまり改善されていないが、若年人口が減る時期に入って臨時増募が終了したので、入学定員は一九九八年から旧に復し七〇名となった。

かつてはかなわぬ夢にすぎなかった学生の海外渡航は、今や少しも珍しいことではなくなった。単位互換が認められる公的な留学制度としては一九九六（平成八）年にセビーリャ大学と、九七年にはポンペウ・ファブラ大学（バルセローナ）と交流協定が締結され、本学から毎年数名の学生を送り出すとともにスペインからも留学生を受け入れている。

戦後から現在までの教材と辞書

終戦直後は、スペイン語の辞書も学習書も市販されておらず、古書店で見つけるしかなかった。大学で使用されるスペイン語教材は、一九五〇年代から初級教科書が出版され始めて次第に種類が増えるとともに、洋書も入手が可能になった。中級以上の教材の多くは、タイプした原紙を用いる謄写版プリントが長い間使用されたが、七〇年代からはフォトコピーが多用されるようになる。現在は録音教材に加えてビデオ教材も利用され、また教育・研究にパソコンが活用される例も増えている。しかし、大学全体の情報処理体制はまだ立ち後れており、府中への校地移転が予定される二〇〇〇年以降の進展が期待される。

辞典に目を向けると、戦後初の本格的辞典と言えるのは高橋正武『西和辞典』（白水社、一九五八年）である。今日から見れば、用例がほとんどないなどの欠点はあるものの、語数が多いコンパクトな辞典であり、長い間、戦前の村岡西和にとって代わる事実上唯一の西和辞典であった。戦後スペイン語を学んだ人でこの辞典の恩恵を受けなかった人はないと言ってよい。その地位は、瓜谷良平『絵入りスペイン語辞典』（大学書林、一九六九年）やいくつかの小辞典が出版された後も揺るがなかった。しかし、平成期に入って、これに代わる新しい西和辞典が相次いで出版されるに至った。桑名一博編『小学館西和中辞典』（一九九〇年）、宮城昇、山田善郎編『現代スペイン語辞典』（白水社、一九九〇年）、カルロス・ルビオ、上田博人編『新スペイン語辞典』（研究社、一九九二年）などである。いずれも用例を多数取り入れた学習辞典のタイプであり、スペイン語を学ぶ者には辞典の選択の幅が広がった。和西辞典としては田井佳太郎（明四二中退、ペルーへ移住し、戦時中日本へ送還）の『和西小辞典』（大学書林、一九六二年）、『和西大辞典』（同、一九六四年）および『和西中辞典』（同、一九六八年）のシリーズが著者の死後出版されたが、その後十余年を経て、宮城昇、E・コントレラス他編『和西辞典』（白水社、一九七九年）が刊行され、今日まで標

準的な辞典となっている。

一般向けのスペイン語学書および古典から現代に至るスペイン・中南米文学の翻訳出版は戦後非常に活発となった。他方、語学・文学以外の領域では、戦前から日本ではスペインよりもむしろ中南米に研究上の関心が向けられてきた。戦前は移民、戦後は貿易を中軸とする中南米との関係が重要だったからである。日本が経済発展を遂げる一九六〇年代以降は、とりわけ政治・経済を中心とする中南米の地域研究が盛んになった。しかし八〇年代以降、研究対象となる地域や分野はますます多様化し、研究水準も上がっている。こうした事情を反映してスペイン語圏の言語・文学のみならず歴史・文化・社会科学など多分野にわたる専門書の出版も著しく盛んとなって現在に及んでいる。

［本稿の執筆に際して、桑名一博、浅香武和の両氏から一部資料の提供をいただき、故宮城昇氏には長時間にわたる面談に応じていただいた。また草稿の段階で荒井正道、長南実、原誠、中嶋嶺雄、河村功、鈴木洪三、岡妙子、山本唯雄の各氏からさまざまの御教示・御指摘をいただいた。記して謝意を表する。］

歴代スペイン語科関係教官一覧

○一九九九（平成十一）年八月末現在でスペイン語科（現スペイン語専攻）に所属する専任教官および語科を通じて委嘱した非常勤教官を就任順に配列した。旧制時代の講師は非常勤講師の中に含めた。

○一九四九（昭和二十四）年以降は特記しない限り新制大学の教官を示す。

○専任となった非常勤教官の在職期間は、専任教官の部で併せて示した。

○資料の不備のため、特に非常勤教官については脱漏または在職期間が不正確な場合があり得る。

○外国人教師の氏名のカタカナは姓・名の順、氏名の後の（　）は国籍を示す。

○氏名の太字は現職教官を示す。

――専任教官（日本人）――

桧山剛三郎　明三〇、九附属外語助教授→明三二、四外語助教授→三三、一〇辞任

金沢一郎　明三三、一二助教授→四〇、一辞任　大五、一講師→八、五教授→昭一五、三退任

村上直次郎　明三三、七教授→四一、七校長→大七、九転任

篠田賢易　明三二、一〇講師→三三、一一教授→大七、一二没

永田寛定　明四二、四講師→大七、七教授→昭二〇、五退任　昭二〇、五講師→二十、九退任

日比文哉　大六、四講師→七、七助教授→一二、九辞任

笠井鎮夫　大八、四助教授→昭四、三教授→二四、六外大教授→三三、三退任　昭三三、六名誉教授

高橋正武　昭六、四講師→七、三助教授→一六、三教授→二二、六辞任

馬場称徳　明四〇、四講師→四〇、一一退任　大一二、一二講師→昭一六、七教授→一八、三、退任

大林多吉　昭一八、三講師→一九、三退任

宮城　昇　昭二一、八外専講師→二二、六外専教授→二四、一一辞任

昭二一、八外専講師→二四、六外専講師兼外大講師→二六、三外大講師→三〇、一〇助教授→三八、四教授→五七、四退任　昭五七、四名誉教授

岡田辰雄　昭二二、四外専講師→二三、四辞任　昭四四―四五非常勤講師

会田　由　昭二三、八外専講師→二五、四外専講師兼外大講師→二五、七外専教授兼外大講師→二六、三外

荒井正道　大助教授→三〇、四教授→四〇、三辞任、昭四〇―四一非常勤講師
昭二五、一外専教授→二六、三外大講師→二八、七助教授　→三七、四教授→五三、四退任
昭五三、四名誉教授

花村哲夫　昭三二、九助教授→三三、四教授→四四、一二没

原　誠　昭三三、四助手→三七、四講師→四〇、四助教授→五〇、四教授→平八、三退任　平八、五名誉教授

野々山ミチ子　昭三七―三八非常勤講師　昭三八、四助手→四一、四講師→四五、六辞任

長南　実　昭三八、四助教授→四一、四教授→五八、四退任

清水　透　昭四三、四助手→四八、四講師→五二、四助教授→六二、四教授→平五、三辞任、平五―八非常勤講師

中川文雄　昭四四―四五非常勤講師　昭四五、二講師→四六、四助教授→五一、五転任　昭五二―五五非常勤講師

野間一正　昭四五―四七非常勤講師　昭四七、四助教授→五三、四教授→平三、三退任

上田博人　昭五二、四助手→五七、四講師→六三、四東大教養学部出向→六三、七助教授併任→平一、三転任

牛島信明　昭五三、四講師→五四、四助教授→六〇、四教授→

高橋正明　昭五五、四助手→五七、四講師→六二、四助教授→平五、四教授→

寺崎英樹　昭五七、四助教授→六三、六教授→

桑名一博　昭五八、四教授→平五、三辞任
川上茂信　平一、四助手→八、四講師→
立石博高　昭五八―五九非常勤講師　平四、四助教授→七、四教授→
杉浦　勉　昭五六―五九非常勤講師、平五、四助教授→
安村直己　平七、四講師→
高垣敏博　平八、四教授→

――専任教官（外国人教師）――

グリソリア、フランシスコ Francisco Grisolia（スペイン）明三〇、一二附属外語教師→三二、四東京外語教師→三六、七退任
サピーコ、エミリオ Emilio Zapico（スペイン）明三六、一〇教師→三九退任
ヒメネス・デ・ラ・エスパーダ、ゴンサーロ Gonzalo Jiménez de la Espada（スペイン）明四〇、一教師→大五、三退任　大五、四講師→五、七退任
ムニョス・ペニャルベル、ホセ José Muñoz Peñalver（スペイン）大六、一教師→昭四〇、一〇客員教授→四一、三退任
サンチェス・ドラゴ、フェルナンド Fernando Sánchez Dragó（スペイン）昭四二、四教師→四三、三退任
コントレラス・ロペス、エンリーケ Enrique Contreras López（スペイン）昭四三、四教師→四六、四客員教授　平九、三退任

ヨシカワ・トレス、ギリェルモ Guillermo Yoshikawa Torres（ペルー）昭五二、四教師→五四、三退任
ブラーボ・メンディオーラ、アンヘル・ホアキン Ángel Joaquín Bravo Mendiola（スペイン）昭五四、四教師→六〇、三退任
ロドリゲス・マダリアーガ、マリーア・アンヘリカ María Angélica Rodríguez Madariaga（チリ）昭六〇、四客員教授→六三、三退任
ヤニェス・エンリケス、ドロレス Dolores Yáñez Enríquez（メキシコ）昭六三、四客員助教授→平二、三退任
ノベーロ・ウルダニビア、シルビア Silvia Novelo Urdanivia（メキシコ）平二、四客員助教授→三、四客員教授→七、三退任
リュイ・デ・ハセガワ、ニーナ Nina Lluhí de Hasegawa（メキシコ）平七、四客員助教授→一〇、三退任
カルデロン・デ・ラ・バルカ、ビクトル Víctor Calderón de la Barca（スペイン）平九、四客員助教授→
クラビオート、グラシエーラ Graciela Cravioto（メキシコ）平一〇、四客員助教授→一一、四客員教授→

――旧制講師および新制非常勤講師（日本人）――

甘利造次　明三四―三五、大一二　平松輝太郎　明四〇―四五
広中強介　明四一―四二　田中（旧姓沼田）豊吉　明四二―大二
村岡　玄　明四三―四四、大三―五　妹尾正男　明四五―大三
藤谷覚三郎　大九―大一〇　田中辰之助　大一一―一二
伊藤敬一　昭三　水谷　清　昭三二―三三

瓜谷良平	昭三二―四三		
鼓　直	昭三四―三五、昭四三―四四、昭四六―五四		
古川武司	昭三五―三九	大原美範	昭三六―四五
橋本定久	昭三八―三九、昭四〇―四一、昭四二―平四		
神吉敬三	昭三九―四三	中曽根悟郎	昭三九―四〇
片岡孝三郎	昭四〇―四一	伊藤武好	昭四一―四二、昭四八―四九
白山孝久	昭四一―四二	辻　羊三	昭四二―四三
高見英一	昭四三―四四、昭五五―五六	加茂雄三	昭四三―四八
寺田和夫	昭四三―四四	橋本一郎	昭四四―五三
伊藤侑徳	昭四五―四六	中川和彦	昭四五―五四
直野　敦	昭四五―五二	増田昭三	昭四六―六三
竹内照高	昭四六―四七	山田睦男	昭四七―五三
佐藤玖美子	昭四九―五一	黒田清彦	昭四九―五四
国本伊代	昭五〇―五八	田中春美	昭五二―五三
岡部広治	昭五二―五五	倍賞和子	昭五三―平八
石井　章	昭五四―五六	**杉山　晃**	昭五四↓
若松　隆	昭五四―五六	後藤政子	昭五五―平一〇
遅野井茂雄	昭五五―五六	秋山紀一	昭五六―五八、平一―二

辻　豊治　昭五六―五七
松本亮三　昭五六―六〇
渡辺節子　昭五六―六〇
濱田滋郎　昭五九―平八
加藤　薫　昭六〇―六二
大高保二郎　昭六二―平一、平二―三、平四―平七、平八―九
中野達司　昭六二―平一
落合一泰　昭六三―平六
佐々木孝　平一―
恒川恵市　平二―六
深沢安博　平三―四
佐藤麻里乃　平四―
大串和雄　平五―六
長岡　顕　平五―九、平一〇―
髙田裕憲　平五―六
小池洋一　平七―八
三角明子　平七―九
江藤一郎　平九―一〇、平一一―

戸門一衛　昭五六―平六
染谷　宏　昭五六―平五
今井圭子　昭五七―五九、昭六二―平七
細野昭雄　昭五九―六二
山村ひろみ　昭六一―六三
福井千春　昭六二―平七
阿部三男　平一―二、平九―
佐藤勘治　平一―三
林みどり　平三―四
長神　悟　平三―七
網野徹哉　平五―七
佐藤邦彦　平五―一〇
長尾史郎　平五―六
狐崎知己　平六―八、平一〇―
八島由香利　平七―八
松下　洋　平七―八
大楠栄三　平九―一〇

栗原尚子　平九－一〇
落合佐枝　平一〇→
愛場百合子　平一一→
芳賀正明　平九→一〇、平一一→
木下　亮　平一〇→一一

――旧制講師および新制非常勤講師（外国人）――

レボリェード、E（個人名不詳）E. Revolledo（スペイン）大三－四
グアスク、アントニオ Antonio Guasch（スペイン）大五－六
カルアーナ・マテオス、マリアーノ Mariano Caruana Mateos（スペイン）昭三二－三九
マタ・トラーニ、ホセ José Mata Trani（スペイン）昭三九－四〇
ミリャン・フエルテス、ホセ・アントニオ José Antonio Millán Fuertes（スペイン）昭四一－四二
ロペス・アルバレス、フリアン Julián López Álvarez（スペイン）昭四五－四九
マロート、テリョ・ヘスス Tello Jesús Maroto（スペイン）昭四九－平二
ロレンソ、ヘスス Jesús Lorenzo（スペイン）平二→
ルイス・ティノーコ、アントニオ Antonio Ruiz Tinoco（スペイン）平一〇→